

---

# か弱き剣影と猛き少女

忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

か弱き剣影と猛き少女

### 【Nコード】

N5844X

### 【作者名】

忍

### 【あらすじ】

弱な体に生まれるも輝く才能を持ち合わせている少年と、力強く元気な体を持つも突出した才能に恵まれなかった少女のお話。

## プロローグ（前書き）

私をご存知の方、おはこんばんにちわ  
そして知らない方、はじめまして

駄文製造に定評のある忍です

長々と語るのは何なので、あとがきでお会いしましょう！

## プロローグ

「では始めようか」

「うん！ やるからには全力でいくわ！」

川神院内にて対峙している2人の若者。

男と女

刀と薙刀

天才と凡才

技と力

速さと重さ

性、武器、才能、様々な違いはあれど、抱く気持ちは両者同じ。

ただ純粹に心行くまで

「これ」

己の全力を持ってして

「尋常に」

戦いたい

「「勝負！」」

そして刀と薙刀が交差し運命の歯車は急速に加速する。

2009年、春

互いに尊敬し、技を磨きあえる好敵手<sup>ライバル</sup>

互いに求め、信頼するパートナーとなる2人の一戦が始まった。

## プロローグ（後書き）

気付いている方もいらっしゃると思いますが、本作品は短編として投稿していた物を連載へとシフトチェンジしたものです

もう一つマジ恋の二次創作があるだろうksが！ ですけど？

……白状します

数人の方からお優しい言葉を貰え完全に調子に乗りました

本命である作品が行き詰まる度にちよくちよく書いているので、鈍  
亀更新になります。がよろしくお願ひします！

剣影、川神の地で（前書き）

短編で書いていたものを分割しました

## 剣影、川神の地で

春になるとバカが増え迷惑を被る人も、それに比例して増加する。

「ねえいいじゃん。少しでいいからお金貸してくれないかな？」

「そうそう。俺たち困ってるんだよね」

柄の悪い男2人が、気の弱そうな学生に金をせびる。所謂カツアゲというものだった。周囲にいる者は、平和ボケした一般人。見てみぬフリをする者ばかりで助けようとはしない。助けたくても自分が可愛くて動け出せずにいた。

尚も続く恐喝に脅え続ける学生。

そこに近づく少年。細身の体を漆黒のスーツに包み、腰にはその姿に不釣り合いな日本刀を差していた。それにいち早く気付いたのは恐喝を遠巻きに見ていた一般人だった。次に気付いたのは恐喝をしていた柄の悪い男、次いで学生。

「なんだ文句でも……」

だが、少年は恐喝にまるで興味が無いのか、その現場を見向きもせず通り過ぎて行く。それを見て学生はもちろん一般人は落胆する。



肩透かしをくらった柄の悪い男たちは、無かったことにし獲物である学生へと視線を戻し恐喝を続けようとした。

が、事が起こる。

先ほど通り過ぎた少年が立ち止まり振り向いた。その場にしゃがみこみ小石を拾うと柄の悪い男二人に投げたのだ。弧を空中に描きながら小石は飛んでいきやがて男たちに当たる。

「テメエ！」

激怒した男たちは、少年へと視線を移し怒りの表情を浮かべ殴るために走り出す。それを見た少年は反転し再び歩みを進める。端から見れば逃げ出そうとしているように見えたが違っていた。

もう終わっていたのだ。

走り出していた男たちの身に異変が起こる。身につけていた衣服が破れ落ち下着姿になっていしまう。突然の出来事に驚き、必然的に足が止まりその場に放心状態で立ち尽くす男たち。と、そこに警官がやってきた。恐喝を見ていた一般人の誰かが通報していたのだ。

「下らん。弱い者を虐げる者も、弱いままにいる者も……」

誰にも聞こえない声で呟きながら少年はその場から消え去った。

「どこか」

少年が立つのは、武の総本山とまで呼ばれる川神院の門の前。門を見上げる少年の表情からは感情は読めないが何かを考えていることだけはわかった。

そんな少年を見つけたのは川神院の師範代を任せられているルー・イー。

「何かご用かな？ ワタシで良ければお聞きするヨ」

「これはご丁寧にありがとうございます。では鉄心殿に取り次ぎを願いたい。黒崎の者と伝えてくださればわかると思っていますので」

黒崎と名乗った少年の言葉を聞いたルーは「しばらくお待ちを」

と言うと、門の中へと入って行き数分後帰ってきた。

「待たせたネ。コチラにどうぞ」

ルーの案内を受け少年は川神院の中へと入っていく。そして通された部屋には1人の老人が待っていた。

「ではワタシはこれで」

「案内ありがとうございました」

「お安いご用だよ」

一言二言、会話を交わしルーは引き上げる。  
部屋に入った少年は老人の前へと向かうと頭を下げた。

「突然の訪問をお許してください」

「構わんよ。で、お前さんが黒崎家の麒麟児かの？」

「麒麟児かはわかりませんが、黒崎真白くろさきましろです。祖父である黒崎清蔵からはよく貴方の、川神鉄心殿の話聞いていました」

「清蔵……懐かしい名前じゃのう。して清蔵殿はどうしておる？」

「祖父は先月亡くなりました」

「そうか……」

鉄心はどこか遠くを見つめ、天にいる友であり好敵手である黒崎清蔵の冥福を祈った。

「『先に行って待つとる。次に会う時はワシが勝つ』祖父からの言伝です。自身の葬式には鉄心殿を絶対に呼ぶなと言っておりまして。武道家として弱った姿を見せたくなかつたのでしょう」

「なに……今度墓前に参らせてもらう。その時ゆっくりと語り合うわい」

真白の言葉を聞いた鉄心は最後までヤツらしいと思いきった。悲しい感情を吹き飛ばすかのように笑う。

「何度か清蔵からお前さんの話を聞いた事がある。黒崎流始まって以来の天才が生まれたと」

鉄心の言う《黒崎流》というのは、刀がまだ主力武器だった頃から殺し（暗殺）や用心棒（護衛）などを生業としてきた流派（一族）で、近代になってもその技術・心構えは途絶えることなく受け継がれていたのだ。

その黒崎流が世に出てからの歳月の中で最も才を持って生まれたと言われているのが今ここにある黒崎真白だった。

「私はまだまだですよ。足りないモノが多すぎます。初代頭首……いや祖父をもまだ越えられてませんから」

「ふむ。慢心は実力を出しきれず、可能性を無くす。じゃが、行き過ぎた謙遜は良くはないぞい」

「いえ、本当の事です。確かに私には、天から授かった武の才があるかもしれませんが……経験がないのです」

膝の上に置いた拳に力を込める真白。謙遜ではなく、本心からそう思っているのだ。

「生まれつき体が弱く、外に出るといえば学校の時だけ。なぜ自分だけが、と思ったこともあります。そんな私に祖父は刀（希望）を持たせてくれました。もちろん両親はそれを良く思わず反対していましたが、私は刀を取ったのです」

「では、今も体は……」

「はい。武人としての体力どころか、年相応も体力はなく、全力で動けて五分……いや、三分が限度でしょう」

「親は何と？」

「祖父が亡くなってからは、より一層反対の声が強くなりました。

ですが私は祖父の教えを、そして私の可能性を示したい」

目を伏せて話していた真白の顔が上がり、鉄心を見据えた瞳には確かな闘志が宿っている。

「わかった。話を聞くかぎり家を飛び出して来たのじゃろう？」

「お恥ずかしながら」

「黒崎家にはわしが連絡しておくでしょう。わしが責任をもって預かる、とな」

「ありがとうございます」

真白は礼を言うと、深々と頭を下げた。

「なに、清蔵がお主に見た可能性を見てみたいと思っただけじゃよ。今日からここに住むがよい」

「何かから何までありがとうございます。申し訳ないのですが、道場をお借りしてもよろしいでしょうか？」

「鍛錬かの？」

「日課ですので」

「わしも同行してよいか？」

鉄心は鍛錬を間近で観察することで真白の実力がいかほどなのを見極めようとしていた。

そんな鉄心の意図を知ってか知らずか二つ返事です承した真白は、鉄心の案内でいくつかある道場のうち、今の時間使用されていない道場へと通された。

「見ていても面白いものではありませんよ」

スーツ姿から動きやすい服へと着替えた真白が道場の端に立っている鉄心へと話しかける。

「なに、特にすることがないからの。気にせず鍛錬しなさい」

「そうですか。……では」

返事をした真白の体から無駄な力が抜けていく。自然体とも言われるリラックスした状態の真白からは、次の動作が読みとることはできない。

一秒、十秒、一分……短くも長い時が流れ、道場は静けさに包まれていた。

少し開いた窓からは風が吹き込んでくる。そして風の悪戯か壁に

立てかけられていた筈が音を立てて倒れる。

カタツ - -

同時。真白の体が前方へと動く。

腰に添えるように置いていた木刀を居合いの動作で振り抜いた。一筋の軌跡を残した刃は空間を切り裂き、風を生み出し道場を駆け抜けていく。

真白は風を追いかけるように前へと踏み込む。床を滑るように前進した真白は、上段に構えていた木刀を振り下す。刀身が床に近づくと刃が返され、跳ね上がった。

切り上げ動作が終わると同時に、後方へと下がりだす。その間に様々な位置へと木刀を振る。まるで何かと戦っているように。

(ほう………)

鉄心には真白の戦っている相手が見えていた。実力のある者が見れば、イメージとして浮かび上がってくる。

仮想の相手と戦っている真白は防戦一方。開始直後は軽やかだった足運びは、まるで床に見えない糸で縫いつけられたように重くなっていた。



「はあ……はあ……くっ……！」

そして顔や体からは夥おびただしい量の汗が滴り落ち、呼吸も荒くなっている。

タイムリミット限界時間が近づいていたのだ。

それを理解している真白は自分を鼓舞するように声を発する。

「はあああああッッッ！！」

限界を迎えはじめていた真白の体に再び力が宿り、莫大な気が流れていく。

だが、それは消えかけた蠟燭が最後に見せる煌めきでしかなかった。それでも、一瞬だからこそ美しく、力強く感じる命の波動。

体の表面から溢れ出そうとする気を、極限まで圧縮。

圧縮。圧縮。圧縮。圧縮。圧縮。

やがてソレは臨界点を迎え、そして爆発する。

四肢を引きちぎらんばかりのエネルギーを、余すことなく使い切る。

直後、道場内には何かが爆発したような音が響く。

音が聞こえた時には真白の姿は、先ほどまで立っていた場所から消え、数メートル離れた位置に立っていた。

カラン。

響くのは、つい数秒前まで真白の手に握られていた木刀が床に落ちる音。

「はあ……はあ……やはり、まだでしたか……」

真白の手は痙攣を起こし震えていた。

「見事。……じゃが、これまでのようじゃの」

真白の鍛錬が始まってから一言も発さなかった鉄心が口を開く。

「ありがとうございました」

鉄心に背を見せる位置にいた真白は振り返り、頭を下げ礼を述べる。全身からは大量の汗が流れており疲れを感じ取る事ができたが、そんな疲れとは裏腹に表情は清々しかった。

おぼつかない足取りで歩き出し、未だ震えている手で床に転がっ

ている主をなくした木刀を拾う。

「良いものを見せてもらった」

「いえ……自分なんてまだまだです」

真白の鍛錬を見ていた鉄心は思ったことを短くであったが言葉にした。

「ですが昨日より数秒長く動けるようになりました。たった数秒でも私にとっては長く大きな時間。そして明日は今日より長く……」

「飽くなき向上心じゃのう」

真白の言葉を聞いた鉄心の脳裏には1人の少女の姿が思い浮かんだ。

大きな目標に向かって、ひたむきに努力を重ね続ける孫娘の姿が。

「鉄心殿？」

考えに耽っている鉄心に気付いた真白が声をかける。どれほどの間、心がこの場から離れていたのかはわからないが鉄心は、ふと思ったことを訪ねた。

「真白君、なぜ強さを求めるか教えてもらえるかの？」

鉄心の問いに、真白は数秒考えたのち答えを返す。

「そうですね……個人の戦いというのは一瞬で勝敗が着いてしまう。その一瞬を味わいたい。勝つも負けるも体に責任を押しつけたくないのです。自分が満足するまで戦い続けたい」

「険しい道のりじゃぞ？」

「それは承知の上です。この体を忌み嫌うのではなく、心身共に強くなると誓いましたので」

初めて剣を握った時に、芽生えた小さな思い……されど叶えるには大きな希望。

強くなりたい。  
強くありたい。

たとえそれが、どんな結果をもたらしたとしても後悔はしない。

そんな思いが十数年の間、真白の心に深く刻まれていた。

「ふむ……良い答えを聞いた」

鉄心は納得した様子で、部屋の準備が整うまで真白に待ってもらように告げると、『ほっほっほ』と愉快に笑いながら道場を出て行った。

残された真白は体の調子が元に戻るまで休むと、道場を簡単にはあつたが清掃し、最後に深く礼をし道場を後にした。

## 剣影、猛き少女と

道場を出た真白は川神院の中を当てもなく彷徨っていた。武の総本山である川神院は大きく人の数も多い。

真白が歩いていると様々な人とすれ違い、客人と気付いてか快い挨拶を交わしてくれていた。

元々、礼儀正しい真白はそつなく丁寧に挨拶を返し、今日から世話になることを伝える。

「結構歩きましたね」

川神院の中を歩き出して1時間半が経ち、少し疲れの溜まった真白は休憩するのに適当な場所を探すことにした。

2分ほど歩いた所に手入れの行き届いた樹木があり、春の強い日差しを遮ってちょうど良い影になっている場所に腰を下ろし背中を木に預け、眼を閉じ全身で風を感じる。歩き回って少し汗ばんでいた体を程よく冷ます。

「良い風だ……ん？ アレは」

眼を開けた真白の目に映ったのは栗色の頭髪を赤の髪結いでポニーテールにした道着を来た少女だった。

手には薙刀を持っており、幾多もの軌跡を残しながら空を切り裂き続けている。

決して軽くはない自身の身長と同じか、それ以上の長さの薙刀を力強く振るう様は、真白の心を奮わせるのには充分だった。

「せい！ はあっ！」

一閃。そしてまた一閃。

真白の視界内で次々に繰り出される斬撃からは、少女の力量が垣間見れる。

自分が来る前から、薙刀を振っていたはずなのに疲れを感じさせない少女の姿は真白には眩しく見えた。

いつの間にか拳を握りしめ立ち上がっていた真白は、それに気付くとフツと微笑を浮かべ、少女の邪魔にならぬように気をつけながら近くへと歩き出す。少女の鍛錬が終わるまでの数十分間、真白はただ静かに鍛錬の様子を眺め続けていた。

鍛錬を締めくくる一文字の薙ぎを放った少女は構えていた薙刀を下ろすと、鍛錬の途中から感じていた視線の主がいる場所へと顔を向けた。少女の視界に映ったのは、肌が白く一見すると女性と見間違ふ顔立ちをした、着物に身を包んだ少年の姿。

少女が自分へと意識を向けたのに、気付くと立ち上がり会話を交わせる距離まで歩みを進める。

「こんにちわ。初めまして黒崎真白です。今日から川神院でお世話になります」

「こんにちわー。えーと、アタシは川神一子。よろしくね」

才能を授かりながらも、発揮できない体を持つ真白。健康な体に恵まれるも、突出した才能を持たない一子。

この2人が初めて会話を交わした瞬間だった。

一子と名乗った少女はタオルで手を拭くと真白に向かい手を伸ばした。その差し伸べられた手を握り返し、改めてよろしくと言葉を投げかけ挨拶を済ませる。その後は、2人して影へと移動すると腰を下ろし話を交わす。

「いつもあの様な鍛錬を？」

「毎日してるけど今日は誰かに見られてるのに気付いたから、予定より長めにしちゃった」

「そうでしたか。お邪魔ではなかったですか？」

「全然っ！ いい感じに気合いが入ったから」

「それなら良かったです」

バツの悪そうな表情で尋ねた真白に、笑顔で一子は答える。それを聞いた真白は釣られて笑みが零れた。



「一子殿はこの後も鍛錬を？」

立ち上がり伸びをしている一子を見て尋ねる真白。

「うん」

「もし迷惑でなければご一緒してもよろしいでしょうか？」

「勿論っ！ 黒崎さんの実力も見たいし」

「ありがとうございます。それと、真白でいいですよ」

「わかった。それならアタシの事も一子殿じゃなくて、呼び捨てで呼んで。あと敬語も禁止ね？」

「わかりま……わかった。これでいいかい？」

癖で敬語を使いそうになった真白は、一瞬詰まったが友人と話す際に使うような口調で答えた。ぎこちないながらも普通に話す真白を見て、再び笑顔になる一子。

「うん！ それじゃ日が暮れないうちに行くわよー！」

先に行く一子を追って真白も走り出す。

空にあった太陽は沈み、今は月が夜の川神市を照らしている。

晩御飯は川神院の門弟たちと一緒に食べ、今日一日の汗を風呂で洗い流した真白は用意された部屋の前にある庭で涼んでいた。

「上手く溶け込めたようじゃの」

そこにやってきたのは、川神院総代であり真白を受け入れてくれた鉄心。

「はい。皆さん私に快く接してくださいました。本当に良い所です」

鉄心の方へと振り向き返事をする真白。その表情は穏やかで良い顔つきだった。

「そう言ってもらえると川神院の総代として嬉しいかぎりじゃ。一子とも仲良くなれたようじゃの。夕飯の時に楽しそうに話しておったわい」

真白の脳裏に浮かんだのは、自分にも向けてくれた笑顔で話す一子の姿。

「あの笑顔に引つ張られ私も元気を貰いました」

「うむ……真白君には一子はどう映った？」

「大きな目標に向かって努力を惜しまない少女。お互いに切磋琢磨できると思いました」

真白の答えを聞いた鉄心の表情が変わる。

「たとえそれが叶わぬ夢だとしてもかの？」

「夢だからいいのです。夢があるから努力し汗や涙を流す。結果の伴わない努力は徒労と蔑まれたとしても、私は構いません。もし夢が叶わなかったとしても、その時には一回りも二回りも成長した自分が居て新たな夢を持っているはずですから。夢が叶うといいなとは思いますがね」

真剣に話していた真白は最後に年相応の無邪気な笑みを浮かべる。

「ほっほっほ、確かにそうじゃのう。ではこれからも見守るとしようかの」

鉄心は武の才能というものを持って生まれていた。一子の目指す川神院師範代とは、才能を持つ者の中でも一握りの人間だけがなれるものであり、一子にはそれだけの才がないと見極めていたのだ。

「真白君の夢は何かの？」

「武の中で生きたい。もし生き長らえた時は、私のように体の弱い子どもたちに武を教えたいです」

「生き急ぐことはない。ゆっくりと歩めば良い」

「自分ではわかっているつもりなのですが、どうやら一子さんを見て触発されたようです」

微笑みながら話す真白は傍らに置いてあった刀を構えると、下段から一気に振り上げる。ビュンと力強い風切り音が辺りに響いた。

「良い友を得たようじゃの」

「はい。願わくば一戦交えたいですね」

振り切った体制から元に戻る真白。

「一子も同じ事を言っておったわい。さてワシは寝るとするかの」

「おやすみなさい」

太陽が東の空から登り始めた頃、真白は目を覚ました。目覚ましを使うまでもなく真白は、毎日これくらいの時間になると起きる。刀を持った日から欠かさず行っている日課である鍛錬の時間である。

「少し体が重たいですね……」

起き上がった真白の調子は良くはなく、むしろ不調。万全の状態

であったとしても、同年代の男と比べて体力が劣る真白にとっては少々辛い。

「行きますか」

寝間着から鍛錬用の衣服に着替え終えた真白は、部屋の壁に立て掛けていた刀を持つと部屋を後にした。

靴に履き替えた真白は中庭で見知った人物と出会う。相手は真白と同じく道着に身を包んでいる少女、川神一子だった。

「おはよう、一子も鍛錬かい？」

「おはよー、ってことは真白くんも？」

「私の日課だからね」

一子の問いに真白は手に持っている刀を上げながら答えた。

「その刀って」

「ああ、そういえば昨日は木刀だったね。これは私が幼い頃から愛用している刀さ」

真白の手に握られている刀の柄の部分は使い込まれ糸がほつれ、刀身を包む鞘は傷が数多く存在した。

決して粗暴に扱ってきたわけではないが、10年間と少しという長い年月を掛けて振るわれた事もあり、新品同様に綺麗なままというわけにはいかなかった。

「見た目は少しボロだけど、私にとって大切な物だ」

「アタシのこれと一緒にだね」

一子は自身の得物である薙刀を真白へと突き出した。

真白の眼前にある薙刀は刃こそ綺麗に研がれていたが、柄の部分は擦り減り、真白の持つ刀同様に大小様々な傷が至る所に刻まれていた。

「新しくて綺麗な物も悪くないけど、アタシはずっと使っているコレが好き」

「その気持ちわかるよ」

2人の顔には自然と笑みが溢れていた。昨日出会ったばかりだった2人の様子を見ると、人と人が仲を深める要因は時間ではない事がわかる光景だった。

「話もいいけど、そろそろ鍛錬をしないとね」

「そうね。真白君は何するの？」

「私かい？ 私はする事は決めてないんだ。体が動く限りできるところをする」

「うーん、迷惑じゃなかったらアタシの鍛錬に付き合ってほしいんだけど」

「喜んで。一子と居ると引っ張られて私自身も良い鍛錬になる」

その後2人は今日から始まる一子の通う川神学園へと登校する時間の少し前まで鍛錬に勤しみ、鍛錬で疲れ切っている真白は、自分と比べ元気が有り余っている一子を送り出した。

「行つてきまーす！」

「はい、行つてらっしゃい」

「ふむ、もう少し無茶をしてみましようか」

小さくなっていく一子の背を見ながらポツリと呟いた真白は、傍



らにあった刀を持つと開けた場所へと歩いていった。

## 剣影、猛き少女と（後書き）

ここでストックがなくなりました

ヒロインはタグにある通りワン子で決定です！

MOMYOはどうしたって？

次回出てくると思いますw

気分で書いていることもあり、プロットは存在しませんのでw

何か見たい話などがあれば言ってくだされば、私の気分次第で書き  
ちやうかもしれませんw

……生意気言ってスママセン orz

では、次回お会いしましょう！

剣影、武神の姿を（前書き）

本命が詰まった ORZ

## 剣影、武神の姿を

一子を見送った真白は鍛錬を行っていた。

川神氏に……川神院に訪れてからの真白の鍛錬に励む時間は、昨日、今日との二日間でも、ここに訪れる前の約5倍以上の時間となっている。

真白の身体のことを考えると明らかにオーバーワーク。

刀を振るっている真白自身、それは理解していた。

だが、真白は止まらない。

手足は重くなり、心肺機能は低下、身体全体が赤信号を出している。

誰よりも理解しているのに、止めることができない。

何故か……それは簡単なこと。

どれだけ動いても疲れを感じさせず猛々しく薙刀を振るう姿。そしてそれら笑顔でこなす姿。

そう、先程まで一緒に居た一子が要因だった。

『自分の身体なのだから受け入れる』真白はそう言っていた。言っていたが……それでも羨ましく感じてしまう。

憧れによる、渴望、熱望、切望が津波のように真白の心に押し寄せてくる。

だから止まらない。止められない。

息切れも酷くなるうとも、真白は振り続ける。

当初はしっかりとしていた型も崩れ、ただガムシヤラに振り続ける。

「ワン子が言ってたのってお前か？」

そんな時、真白の耳に届いたのは女性の声。

自然に手は止まり真白は振り返る。振り返った先にいたのは黒髪を長く伸ばし、一子と同じ制服を肩から羽織った少女 川神百代。

「もう一度聞くぞ。ワン子が言ってたのってお前か？」

「……ワン、子？」

途切れ途切れになる真白の声。原因がわかっているのか百代は特別気にした様子もなく答える。

「ワン子ってのは、一子のことだよ」

「一子さん？ ワン子……ああ、なるほど」

頭の中で一子のことを思い浮かべたのだろう。苦しそうな顔をしながらも笑う真白。

「一子さんが言っていたのはおそらく私のことでしょうね」

目の前にいるの人物が探し人だったことに喜びの表情を浮かべる百代。

そして同時に落胆の表情も垣間見えた気もする。

「お前強いんだろ？ わた」

百代の声が途切れる。突如として現れた鉄心が百代の頭を叩いたのだ。いや、叩いたではなく、どついたという表現の方が正しい。おそらく一般人があの手を貰うと、卒倒するだろう。それほどまでに凄まじい音が出ていた。

そんな一撃を貰いながらも、軽く頭を押さえている百代の姿を見て、真白は目を丸くする。

「ばかもーん！」

「じじい、なんでここに！？」

「モモお前が帰ってくるのを待っておったんじゃ」

「なッ……!?!」

「さあ、早く学園に向かうぞい」

そんな会話をしながら百代が先ほどの拳骨のお返しにと正拳突きを放つ。それを鉄心が叩き落とし拘束するために腕の関節を取りに行く。それを撃退しようと百代が反撃、それに対し鉄心が反撃という応酬、プチ戦闘を繰り広げ始めた。

草木を揺らし、砂を巻き上げながら目の前で起きている出来事に真白はただただ呆然とするしかなかった。

1、2分ほど経った頃だろうか、真白が二人に話しかける。

「あの一」

「なんだ?」「なんじゃ?」

「いや……時間の方は」

一瞬鉄心と百代の気迫に押されかけた真白だったが、恐る恐るといった様子ながらも言葉を紡ぐ。

「げッ! もうこんな時間か。じじい、続きは帰ってきてからだ」

身に着けていた腕時計に視線を移した百代は、時間を確認すると拙いと言いたそうな声を上げると、疾風を彷彿させるような速さでこの場から文字通り消える。

「全く困ったものじゃ……」

「あの、彼女は？」

「川神百代じゃ、名前くらいは聞いたことあるじゃろう」

「彼女が”あの”川神百代さんですか」

「迷惑をかけたの」

「歯止めが利かなくなっていたところを救われました」

「そう言ってもらえると助かるわい。それとあまり無理をするのは良くない。気をつけなさい」

「そうですね、承知しました。鉄心殿も行かなくてよろしいのですか？」

「そうじゃのう。では行ってくるぞい」

「行ってらっしゃいませ」



会話を終えた鉄心は真白に送り出されると、先ほどの百代同様に消え去っていった。

「川神百代ですか……恐ろしい人だ」

そう言った真白の背には大量の冷や汗が流れていた。対峙しただけでわかる実力。超一流の者だけが発する闘気を感じ取っていたのだ。

「私もなれるのか……いや、なってみたい。ただ……」

真白は首を左右に振り周囲を見渡す。

「ここを掃除からですね」

百代と鉄心の戦闘で、そこらじゅうが嵐が過ぎ去ったかのようにメチャクチャになっていた。

紺を基調とした着物に身を包んだ真白は、箒を両手で持ち川神院内を掃除していた。

川神院でお世話になるのだから、これくらいはして当然。

始めは「お客様にそんなことをさせるわけには……」と言っていた門下生たちも、今は真白と一緒に掃除をしている。

何でもない掃除風景

何でもない会話

ただ時間が過ぎていく

それが真白には心地よくて仕方がなかった

門下生と話している真白の顔に笑顔が浮かぶ。

掃除を始めて1時間ほど経過し、あらかた終了すると門下生の一人が真白に休憩するように促してきた。

「でも私だけ、よろしいのですか？」

「今日は十分助けてもらいましたので、黒崎殿は川神を見物してきてください」

「そうですね……ではお言葉に甘えさせていただきます」

「夕食は7時ですので、それまでにここへ帰宅下さい」

「わかりました。行ってきます」

川神院を出た真白は、仲見世通りにある和菓子屋で気になった和菓子を購入した後、多馬川の土手で春の心地よい日差しと風を感じながら食べていた。

ここに立ち寄った理由は、ここしか食べるのにちょうど良い場所を知らないためだった。

ちなみにこの場所を知っていたのは、昨日の一子との鍛錬で走っていた際にこの近くを通ったからである。

「ご馳走さまでした」

買った分の和菓子を食べ終えた真白は、疲れの溜まった体を休め

よつと寝転がり睡眠を取ることにした。目を睨ると数分もしないうちに寝息が聞こえてくるところを見ると、想像以上に真白の身体は休息を欲していたことが伺える。

「真白君？」

「ん……」

「真白君？」

寝ている真白を呼ぶ声が響く。

「……」

「こんなところで寝てたら風邪引いちゃうわよ？」

「一子か」

声の主は一子だった。眠気眼に移る一子は川神学園の制服を着ており下校途中だったことがわかる。

「どつやら長い間寝てしまっていたようだね。起こしてくれてありがと」

想像以上に疲労が溜まっていたらしく、呼ばれるませ起きなかつたことに少し驚く真白。

だが長時間寝ていたこともあり、かなり体力は取り戻せたらしく身体の調子はいくらかは良くなっていた。

「でも何でこんなところで寝てたの？」

「一子に用がなければ帰りながら話すよ」

「じゃあ一緒に帰りましょ！」

そう会話を交わした二人は、落ちかけている日をバツクに多馬川の道を歩き出していく。

川神院へと戻ってきた二人は、とある現場を目撃する。  
その現場とは武神・川神百代の決闘だった。

相手はおそらく名のある武術家なのだろう。遠巻きに見ている真白たちにも強いということが伝わってきていた。

「あの人はい？」

「たしか中国で今一番強い人じゃなかったかしら」

二人の会話を尻目に開始の合図が響き渡る。

それと同時に百代が電光石火ともいえる速度で武術家に接近すると正拳突きを叩き込んだ。

この一撃。たった一撃で勝敗は決ってしまった。

「これが武神……川神百代……」

真白から小さな咳き漏れる。

噂には聞いたことのある百代の実力を目の前にして体が震えていた。

これが圧倒的な実力から感じる恐怖なのか、それとも武者震いな

のか……………

「どうしたの？」

飛び出したいのか

「大丈夫？」

逃げ出したいのか

「真白君？」

わからない、だが身体は震えている。

小刻みに震えているのは事実。

止まらぬ体を押さえるように、真白は両腕で身体を掴む。

様子がおかしい真白に一子は声を掛け続けるが、真白の耳には届いていなかった。

そんな二人のもとに武神・百代が近づいてくる。

その顔には戦ったばかりだというのに戦闘への欲求が張り付いて

いた。

闘気を撒き散らす百代の接近に真白は正気に戻る。

ふと真白が顔を上げてみれば、すぐそこには百代が迫っていた。

「また会ったな少年」



**剣影、武神の姿を（後書き）**

感想等、何かあればよろしくお願いします！  
それでは次回お会いしましょうw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5844x/>

---

か弱き剣影と猛き少女

2011年10月29日01時15分発行